



燕石十種二輯
戲作六歌撰
完

校了

特別
~13
4158



燕石種之輯之巻

戲作の家撰

苜蓿書農

蛭島子補訂

附録画本三人

山東京傳

名醒字西星醒之有と号は又山東庵菊を号する等あり
 通稱を京傳傳とて京橋銀座をて目し住して烟管煙色を
 一家製し之價甚高九其餘製薬を繼ぎて業とし初北尾政美の字
 ひて西澤の改演と名せり又狂歌をよみて身軽を折射と名せり
 活著遊を号とも中興戲作名の翹楚とて文化十三年丙子九月七日病没
 年五十四西尾同院に葬る法あり

辨譽智海京傳

一志祖信篤考信明仕某候多病辭仕隱於東都市駿大森氏
生翁及百樹翁少好稗史小說數百著作□富戲文幼說謬悠
無根能令人悲能令人喜坊間書賈進於剖劍者利市三倍
於是兒童走卒莫不知京傳者晚悔少作無益於世改勵刻苦
搜索高秘著近世奇跡考及骨董集二百年來奇談逸事
考據精確可以補史矣文化十三年丙子九月七日沒歲五十六葬
國豐山回向院弟百樹埋公羽幼字寫字業於淺草寺中柳本
祠則以遺財建碑刻公羽國字記言以告後之讀其書而不知
其人者爾

文化十四丁丑春二月

江戸南函 實撰

京山磐瀨百樹再書

穴注 世祥 鑄

回向院中墓誌

此兄諱醒字商星一字京傳号醒奇号山東庵磐瀨
氏其先出自磐瀨朝臣人上近世資詮者仕太田道灌為
諱臣道灌亡世隱於勢州一志祖父信篤父信明仕某候多病
辭仕隱於東都市駿大森氏生二男二女亡兄為其長自幼好文
十歲縮字孟子今尚存家自十九始有稗史之作上梓者百五
十餘編因茲其名聞海内王公妾婦牛童馬走無不知其名
茲文化十三年丙子九月七日病沒歲五十六矣予弱冠出仕

篠山藩病辭仕絆與之兄同筆研有年無常風來玉樹碎
痴心月照蕭葭葭堂嗚呼悲哉

息弟

京山磐瀨百樹謹撰并書

定世祥鑲

岩瀨百樹字鍊梅号京山岩瀨朝臣人土之遠裔也父信明
勢州一志之地土末江戶娶大森氏生京傳公弱百樹及二女百樹
自幼嗜文武弱出仕笹山侍從多病辭仕以及鍊筆之技為
業自戲有禪史之作乞梓者隨至編作日富与兄有時鳴雖
然少作之名為大方所耻也時五十三已過上壽之半故建壽藏
自記名氏聊有亡後之勞命

京山岩瀨百樹誕辰之辭後撰并書

于時文政五年壬午夏六月十有五日也

墨水石匠定世祥鑲

寬政二年庚戌秋八月

岩瀨氏之墓

岩瀨傳左衛門信朋 建

男 傳 藏 有清

○公初の戲化悔の行まて去處境遊地之者名男女其志を
かゝる 則其其風を希て戲化之業を其門

人多くしよとていへる者もどく有れども許後をそのゆと
ましく見ても見他の冊子「紋津五郎剛勢談」おとひ「万福長者榮
花譚」兩種共文之斯の如く何より「あまのむをたがは」くつども
京傳うらむ敷代の子を入堅く出せしと見え多むと相うん
括へる者も唯閑亭傳笑つと或人のこと

○或説に中姓拜田といふことと又曰そと寶山といひて古
ま冊子の印章に寶山之兩字を用ひるは何れも且縁野國藏
本「浮世繪師考」といふ寫本を閑亭に宝山とあると何れも前
もつる如く菊の當年の門人か何れ門人か見えて京
傳門人墨毛と物見乞又文化申の門人拜田佐平佐牛といふ名も見

え多むる古き冊子「鶴岡邸富興行曾我」といふ山東鶏古
シホカセといふ名を記し京傳二十五年曉序を政のぶとあるもた
山東唐といふ門人なり

法東多む巻末に三教指帰をも所傳有る無実あり派牛又鶏古
あつていふやあつて其のつとあつていふはなや

○菊が生涯没年おもていふるも宣曆十年正年之浮川本場また
月他の冊子「作者胎内十月圖」文化元甲子年三冊産喜後あまの年を二十七年の
敷代をいふといふれ安永七年に當り十八歳と初代あり
京山を撰つる書巻誌に十九より始めて得史の作何れといふれば
安永七年刊本なる市に及ぶる時の事なりといふ胎内十月の

関の自ら書きし福本の成る時と云ふ

○公卿の著述せる華冊を又讀布共く文体一風ありては女
童の流俗をまじく尋常の國もあはれき。奇詠見を習ふる辭字を
おぼく用ひも曲刺の風ありては目新しきものありては
おもしろくは物者もまた多岐別あり行われは直あり

○此の如何人の筆をまじりて後言とて冊多し評者の在り
隱きし其具人知れども中にも羽を撰むる骨董集の説がある人
奪りおれり説の如きものありては羽ある骨董集上と其人に對して
評の説の筆の奈羽多きを足下目説とて唱へては下もあはれき
惚きとていふは感入するものありては下も我つては下目説を

奪り何を證據にやと其文高きありて説破多ありては京
傳の如くは匠上論議するものありては物と喘息大いそ聲して聲
血吐く盛樂をたまけりては家か州に小出好く病を起し
能くも憂ふ病に傍死たりき是其方か死せぬものありて人
あはれ知れりては^{か上は言のみあり}物もや否やハ去りては予書習文
書堂に語つたけりては熱いものありては病の両三ありて何るも
あはれ波にぬき給ふ家兄京山子然きものありてはひま

○世俗に書を心得るものありては自惚といふ自惚を又艶に
といふもの詞をなまき男を思ひ誤るうたがし艶に言ふは
いふがたき月とては海を渡る船先男をいふは言の起

王を初め著述せしは生空丸の蒲焼と云冊を自惚を著
者の名を頼河郎と号たりゆ。この著述大に世に流行れり。此
廊中にも此艶沙と云詞行れり。今も狂人の口に出たり。今娘姫を
甚助と云ふ詞も如し。此冊を寛政九年の刊行あり
其羽年三和の著しある冊も又縁は艶物語と云を
敵画きぬ是前年と云丸の蒲焼流行りて依りて作すべし
左より自惚を艶沙と云ふと云ふ如し。如くおもしろ。又
洒落本の中自惚と云ふと云ふ如く如何なる故か。此を洒
落本の作者と云ふ艶沙と云ふ者有り。前より自惚の名に據
て名づけたる。戯本に云ふと云ふと云ふ。或は此を業

あつたまゝに切らばよき事也

○文化五戊辰年春見せし冊子「紋澤五郎強勢談」は君がおぼく
画きたる繪柄あり。或偏盲鼻欽又鼻高類にけり。膏藥
かひ多し。うら多し。様多し。いと見若し。此画を
實の根柢と云ふ。これを見せし。吾もこれを見せし。其
極多し。何れもよき。わ画きひあ多し。皆これ作者の
志を畫きたる。京傳と云ふもの。君途中に見せし。何れ
に捕へたる。よき恨んる。重し相譚あり。此の事あり
者。或は打違たり。其場あり。行人と云ふ。石段あり
行違り。其中に羽を見せし。名有り。彼に京傳あり

仲秋の月、めでたし、今川が、(七)とどく酒宴、(八)とどく

餘、三馬の撰、狂歌、藤、裁多、故、歌、也

○文化三丙寅年、著り、読、本、昔、語、福、喜、表、紙、五、冊、書、實、
主、重、堂、伊、賀、屋、が、藏、板、多、也、又、同、年、印、行、の、書、知、多、安、方、忠、
義、他、冊、書、林、仙、雀、堂、鶴、屋、が、藏、板、二、書、也、世、行、の、事、其、以、
知、る、多、也、物、々、其、の、年、文、化、五、戊、辰、年、の、春、浪、石、の、書、也、
兩、冊、也、以、福、喜、表、紙、之、方、趣、が、狂、言、之、也、之、也、が、大、流、
行、多、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、
也、其、提、二、冊、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、
一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、
一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、

石破 名在 傳言 可也

貞享二年の卯市、美州師宣の書の繪、二冊、行、名在、
山三郎、繪、其、と、も、も、詞、書、の、一、冊、也、山、三、郎、の、里、信、也、
名在、山、三、郎、の、父、三、郎、在、ら、る、者、の、何、回、國、依、見、の、里、
信、也、破、傳、在、ら、る、事、也、北、州、の、事、也、信、也、
梅、村、嘉、門、一、冊、也、松、君、高、百、の、書、也、ホ、ウ、事、也、也、也、也、也、
ほ、ろ、げ、ん、の、字、記、も、も、も、也、又、其、蝶、の、筆、也、名、在、山、三、郎、
流、討、の、絵、巻、也、世、傳、也、一、冊、也、詞、書、也、一、冊、也、殊、也、也、也、
僅、書、也、一、冊、也、延、寶、天、和、頃、土、佐、様、の、御、理、也、一、冊、也、也、
一、冊、也、名、在、見、也、一、冊、也、漸、也、也、也、一、冊、也、山、三、郎、

又之書を以て後編一部を掲て上本せり。其賜顧の君を若
地縁分の書鋪に納め常て一覽を賜ふの後如判語所
謂言し別邦所を付寄の標を打粉の國を翻刻して存せり。ハ
せり

在室月古書館道徳堀角の書居二のうらむ性言

座本 孫川辰翁

まのわが不破の関由まのわが

けいせん輝仲紙十枚

りふ名舊書出さ

志川七五ノ助
直松結
市岡和七

古性言伝名

四行の田舎

在室月古書館道徳堀中の書居二のうらむ性言

座本 志川吉右郎

稲書の表紙字の彩色
十帖厚紙の意の字層けいせん輝仲紙
九冊

古性言伝名

志川三助
志川馬助

四田舎

○近年江戸堀中におきける古稲書表紙の趣と性言仕組をせり。其
古性言傳の道年天保七の申年夏性言の中初をいせり。古性言
世々星知相馬舊殿とてり。古性言世々星知相馬舊殿とてり。古性言
六月七月初の古性言世々星知相馬舊殿とてり。古性言世々星知相馬舊殿とてり。古性言
おこは性言見せり。古性言世々星知相馬舊殿とてり。古性言世々星知相馬舊殿とてり。古性言

又姫後月丸二役三役太丸後藤源五郎兵衛六郎藤
由七役権八やく純友市川丸花助長門二役頼信三やく
二の瀬河吾四やく三郎五やく大定太郎七市和羽左門右助
む踏浪六郎二やくかけち三やく左近四やく佐五郎今一役名か
忘る市川丸三郎五やく錦木三役お房四役市川
五やく郎三流橋丸三役老徳三役依七若大呂友右助八若大當三何く
初まは相言評刺ありしあり斯の妙徳物徳の趣向が今こままをまをまを
言い仕組角官の目が悦びもるるの羽の答れといふべし

○ 京傳の羽の像二女の蛇柳と三竹枝の圖が換りし

あり其序

櫻市丸三郎五やく山主の様三市川丸三郎五やく戯作者

京傳といふ

山東京傳肖像



香蝶樓
國貞画
國貞

式真三馬

名奉輔言久徳中町唐もも通称坂南地太助といふ遊戯
堂酒花月吟囉哩樓四季山人遊戯道人戯作舎滑秘言堂示
の数を何の中町言月信て家祭の第は遊南きと世といふ今雪化
初年の英子いふ也

○墨川亭三馬大人の父八丈為ふる為朝大明神の祠官兼地土は
が孝服の男を副刷氏と南地兼兵衛といふ安永四年浅茅
田本町三月生まれ文政五年閏四月卒没年時享年八歳川雲光
院と葬ふる 法号 歡喜言喜樂奏天信士
辞世 善もどげ悪もはくはくはく地をとも言は始魔といふ

文化三年己卯
二月上院建之
七十五羽

須藤多宮自詠
應需

本町三馬書

碑裏如此アリ

安政七庚申年

閏三月日記

法東子

○法東子云平付年柳島多妙見の境内に建てる碑面を見らるる
其他の辞せし初代作らるるも世に悪くはくぞ終るる佛も
はめども痛難きとてとありしはあまれどもうおほし由再ひ
尋ぬべし

又云は辞世須藤田宮といふ医師歌し三馬と書きまて彼の境内へ

建碑する式あり高名ありて入ると思ふと彼人自ら語り

此と友人遊栗園 西國橋吉川所の語也
書林山田佐助

○法東子の書實北林三年平の書記ありるは物語の序とて三馬

知りし儘の家は長きと信ひ願ふ奇才あり十七公家の始りて實化と云

ぬ後山所の書實万庵右左衛門の 号蘭が家の婿とあり不離偶の女病で
香堂

法東子の書實北林三年平の書記ありるは物語の序とて三馬
知りし儘の家は長きと信ひ願ふ奇才あり十七公家の始りて實化と云
ぬ後山所の書實万庵右左衛門の号蘭が家の婿とあり不離偶の女病で
香堂

みまかり後彼家を出る冒市に古布敷と高ふ山左衛門と其は不

専ら戯化と云又石所新道とト云せし近く本町に移り住む西宮右左衛門

春松軒西宮村と題意ありしは此の語あり

○文政三辰年八月拾一日予摩多本町書面書知とある前年 文政二
巳卯秋

浅草寺中おいて諸人の競ひ視るる細工の観物ありおひ得る戯化

あり成りて時をいへば様上人と其心を和綴りて冊とあり是れ大又

見せり大人一覽の後此他誠感とて餘り吾門人三馬の様

細工見物譚を勝る趣向とて惜ふ文辞とびて世

の風をたぬるの物語なびか其日彼の由母と云ふかせと

いへりて大人一覽とて其後彼の語と訪ひりか其時世俗の流

かゝる鑑賞家の概は有たさき

その概の概はひそかにひのそれありそのうちもその概を述べた

○文政四年己の夏布所習に訪ひてこれに法を以てこれ去年の夏布
所習を以ていふ文晁の羽の内室が物語は此の流に唱へてあつた
うきうきとあつた子難多行りて布所習三馬のちうぐのざね歌詠た
りて或人のまを物語として詠ふれあつた其うきうきも覚悟のまじし
大人といふはうきうきかゝる去年の春のうきうき其程歌をうけて進ん
とて傳へたはうきうき美濃の歌にうきうきをうけたうけて送るれ多し歌を

業之羽の書画をうきうき陽田の櫻うきうき画多し

陽田堤をうきうき時おくれしうきうきおくれし花の白うきうき 三馬

狂歌堂真顔翁傳ありてうきうき我も流たりておくれし

とて文晁の羽か蝶のか多画多し三羽

今もゆる人のうきうきゆるゆる蝶々静腰うきうき 真顔

狂歌のゆるゆる歌ありてうきうきをうきうき

今もゆる蝶々静腰うきうきゆるゆる急趨向とて又おくれ 三馬

時うきうきうきうきゆるゆるのうきうきうきうき 亦序書

○書画の會席におけりて画のうきうきをうきうき替がれ歌が直ち

見書て人のうきうきゆるゆるの三馬と故馬馬のうきうき双うきうき

うきうき 當意即妙音とてうきうき

又一時大人うきうき物語をうきうきとておくれしうきうきおくれしおくれし

の巻殿に仕するにせられおかしく伯母の對面のため身殿にゐるに好む
所を以て傍らにあり冊を成すとて讀む其篇はまはら半仕女たるは量
二年も似えたりまはら讀むもの拙い比今の極く斯く文才長
し其後後ごころある者うあらんをいしれが十三五年の頃止
りお多の戯曲をよもしく覽讀し十九七の年の頃戯作の志あり十八
年して獨り始めて天道信せし出目探三冊豊國画西宮板實政五年刊行
萬葉歌の著し出板ぬは冊を成つてその初夜収るる今巻袖より
お出して稿を寄る多う事判るのち自ら戯多があぐるんをいしれは
しつゝ向うなるや中々成つてつけ其成をわくお捨る多うは傍に投て
是が又拾ひしつて得るもの拾成を捨きまうつけけし戯多を

お三人三馬は
しきてめおな
下の三馬は
あつて強り
かほし

即成有る三馬に有るは是を心決し遂に是を月ひ多にお
まつてまう年毎に兩部して著せしむる實政十二年刊行太
馬記向録卷三冊西宮板とつて成篇し多う人の嫌疑を得其怒りこれ
縁を許しこれ輕いぬ即知とあかす書曾成しそのあは父もた
く助成たりけしおんやう賢き御忠をよて教をせり後父乃
をいし戯作の書と廢せしし論はつて其道は捨るはひしを
隔てし著作成りぬかありりて思ふ者も高くは成り
雷を郎の一作大に行れしう幸しと年評判し世人もよ
しつゝの

○大人を撰ぶる讀本に阿古義物語とつて五巻なり稿あり改一陽有

由豊國の許稿中より多し一陽存しうれり故行つての補繪す

其後と云ふ画まじややくは滞りあり其故やまが或喜

情が著しいさ加頭の文を喜成斯まて已に厚如その根

と云ふ自ら一陽存しうれりまのほり言がもて罵る其忌

慢かきりら豊國の言がもて説多れも或喜が怒解けは

何と云ふ隔心いさはさる吾作喜も冊多し向後彼と

画いさは彼方とも彼方とも冊多し吾とて画いさは

罵りあり言實向喜を文豊堂とあり双方和解し文化も

唐申とて文豊堂と上り也一對男時花歌川とつる冊子三馬

る編書と云ふいさ前編と後編一陽存画とてこれ初と稱

後編書卷一柳有豊堂の画とては後とて呼ひ初日後の二り

の程言の如くいさはさる画もこれ多し故もたつて入喜ふ

うく彫刻も細とてまて是をたて或喜と一陽存和睦の媒と

文豊堂も喜ふなりいさはさる殊とて美し面自も冊多

とて看官の語判つて行れ多しと云ふ一鳳存國も存すの由

物語りぬ

○文政九年刻成とて梅精奇談魁双紙とつる讀本五巻の浪をの書

肆文金堂河内屋太助江戸の書實仙鶴堂鶴屋喜吉門下とて

合梓とて若市とて續繪國也画けりぬ文政三年存の

神三馬子の首稿五巻とて下に伝へ繪書せしむられ拙筆とて

後にも物言ひをなすに因縁しつれども許さばに遂に其言に従ひ是故と
するれども遷延しつれども羽三考あび幸して落布ぬ大人予といふ
原らの三考のこゝろに豊満の男豊満の画に多れも彼水不音と
世に早し其画はもともともし其画は其緒結三五丁出—
るも後國貞の画といふも稍久し彼方いついし玉もれも出来
ぬ取成たり其語を—この考予の淨言早しとあはし言し
を經て成の考國貞の筆も少く又一時おれ大人に語つては此の考友
ある光房といふが講釈も源氏物語末摘玉の巻成破つる是聊の
或はの掛物もあややと問ふれども大人は多し其物後れ隨一
諸人あはれ又詳なつるのたしけし世に考者ありといふも或は考の

素をなすもつるしもたれにたし今も或は考—
慰めんれおひあはし部の講釈ももれ破も及ん源氏の
も水許傳もももつるしもたし今も或は考—
とらあて知たつるも人も或は考の也といふも故もれ餘も源氏の凝
てややと知たつるしもたし今も或は考—源氏とつるし
うもしと或は考の勝ももたし今も或は考—
うも多し唐茹もも其は病の田糸も世に考も四文も其
うもしと或は考の也といふも故もれ餘も源氏の凝
○やも大人も冊子の程に考ももつるしもたし今も或は考—
考の物も腹もももつるしもたし今も或は考—

已りたる冊を多くあり文化のしるしの念を讀本俱く流行し
三馬豊國等諸方の書肆の種々な本を乞需らるる其約未の初
後れ讀むるに其書に五或七日をうけて書肆の許ふり一石
を借して其稿を成し其縮が画きぬとあらたに今より某甲の二
階在り羽言に其乞う辭合に行きぬたきあた思ひて尚それをも
その届まで約束の期おくれ多る書房を責むる其昔より其行先を
知れざる後々もやうしてそれの方廻り行はざるに昔に
今の如く作者の作料洋債をうけて返す事と取らるるに
り京傳の常より洋事かといへる作者稿本が書肆に其冊子の幸
しして行われ書肆の利を得る者其のめがねを乞ふる其禮謝

とて結了或縮緬云々の體におもひ若くは後^作施料と云者を
定めて作者の方へしるるものあり或は作者が官書^中を乞ふ者もあれ
高金取とせしめ猶多る者有る時其振舞はるる書肆の作者
画工がけい或は或は場見物とせしめ或は振起し出るるものありぬ是稗史の
流行成^盛とせしめ利を得る者自信多る故と三馬にうづりし語
多る雪丸おとくく近頃うけて多る振廻りするものありぬ是今稗
史の行つる中なること違ふ事多る故とてしるる冊子の著者
に吾日とせんことしるる事多るは日書坊の著者表に出して作者画工
の利柄を乞ふるに成りてあせり
○大人、二人目益全交ふるべしと違ふ人何れぬも業は拙と乞人の

若狭屋きんしつとてし止るる一葉のけり著述の半陸道あはひ馬
羽化の廊節要武喜三馬多古入世余と文の遺言を付はなう二代
目の全文とつゝ我々を不傳共いやれし著作とせし古人の高名をば
悲れりしをいふ改名をばはるる和語をば行ふを吾々全文とせし
五葉実を希れしと記せり

○武喜常詠の粗歌狂文視録の如聊在と居

早考 鶯 けしあはれを言の若人しめりしものあやうもぬ一ぬ
花 巳けのばる花の若人しめりしものあやうもぬ一ぬ
百子 近櫻らむくちつまじくしつゝも復たはらむもあやうもぬ

音

汝う春初まらえししも音よたがまらえしし初音妹

月

初音をば邪人しめりし月をば初音妹

氷

飄もて飲るる胸のうらも身もさやほつと夕

霞

中の中うらもさやほつと夕

人

人とうらもさやほつと夕

初

初音をば邪人しめりし月をば初音妹

傾

傾城のうらもさやほつと夕

買

買はれしうらもさやほつと夕

秋

秋の夕暮

暮

暮の夕暮

甘き歌
うららかに

狸の石
多きを自ら
香の若介
抱き狂歌
の移々

百目浦

おき多かきあはれいひるも歌うもいふもあはれいひるも
彩色歌のうららかにしげ繪のうららかに素人あはれいひるも
富田に流波むさしきもや繪と文字と両方に見ゆるあはれいひるも
香人のあはれむさしき大層殿のうららかにいひるも
下々の狸酒中の趣歌もいひるも
生解のあはれむさしき相好いひるもいひるもいひるも
池水のうららかに百目浦のあはれむさしき作の風のうららかにいひるも
洗濯のあはれむさしきあはれむさしきあはれむさしきあはれむさしき
長竹のうらむさしき鷹もあはれむさしき四十八多の風もあはれむさしき
長竹のうらむさしき竹もあはれむさしき長竹もあはれむさしきあはれむさしき

名歌初を移しし黒くまの心の鬼の角たらしむ

か雨のうらむさしき水もあはれむさしき

いひはしうらむさしき双成のうらむさしきあはれむさしきあはれむさしき

あはれむさしきのねむさしきあはれむさしきあはれむさしきあはれむさしき

唐猫のうらむさしきあはれむさしきあはれむさしきあはれむさしき

と常のうらむさしきあはれむさしきあはれむさしきあはれむさしき

つけあはれむさしきあはれむさしきあはれむさしきあはれむさしき

三浦のうらむさしきあはれむさしきあはれむさしきあはれむさしき

白雲の色もあはれむさしきあはれむさしきあはれむさしきあはれむさしき

とくもあはれむさしきあはれむさしきあはれむさしきあはれむさしき

瀬川路考
三浦の歌

さしぬいゝ客の密史の巻の海にちの暮のこころにあり
うらふおぼろけをあるうらふとんた趣向の有田歌をうらふれ
と山出のこころをこれうらふとんたねるゝ歌の山出

浮雲の嵐見通ふあつたまはる雨の枝橋に風をさす
ふひのこころを御本節にさすまぬゝ恨を八幡鐘にかこ
つゝいゝの廊下鳥の曾泊のまゝをさすあけうあゝの
明をさす道にさすゝあゝ密史のこころめにお客た客
まゝ密史のこころをさすゝあゝ必お近ひうらふあゝ

七借三并
助言初後
とてあり
助言の入りあゝうらふ本戸のなまゝをさす又くゞる見物
梅やあゝをさす竹の皮づゝと音つゝみと送る本下川

秋梅が
屋
梅うつま目うつまをさす梅あゝ志なまゝの庭の鳥

式亭三馬肖像



曲亭馬琴

名解字類去龍澤氏より通稱清者なりといひて元飯田町中坂下の
如^人既^し多^し其^の智^識博^大徳^を名^を知^れり^て男^守伯^頼明^神子^同脚^所と^同居^すも^文政
七年^に此^の刺^髪し^て曾^々氏^と云^後四^谷信^濃坂^の上^に住^居す^も嘉^永元^年戊
申^年十^月廿^日没^す年^年廿^二歳^多

辞世 世^の中^乃や^知の^うれ^ても^よの^うら^ひにあ^めと^つち^のく^形

○馬琴^子實^政の^しら^め京^傳の^門人^と多^し京^傳より大^泉山^人の^号成^信
し^る日^深川^永代^の心^所出^生故^永代^の山^号成^信と^教多^しも^實政
三^辛亥^年廿^三日^神明^を和^泉庵^に号^すり^て出^板の^二冊^も行^はる^外題^に

廿日余 四十兩 尽用而二分狂言

京傳門人 大泉山人 作とあり

是れ其の最初なる寛政五癸丑年馬琴の改定は年者市也 廿五
長く

浮世 御茶漬十二因縁 三冊 荒山水天狗鼻祖 三冊

花園子食家物語

寛政五癸丑年より嘉永元申年まで五十年の著作数多致耽

も黄表紙全巻物ありし 再入読本に手柄多し

○初編八巻の年、傾城水滸傳 初編八巻の年、八花の阿達が利

鑿のしと後入し

是竹の世知もつらき一づく徳も徳の毛あまればなきはそ
りして結のしとたぬぬ油もあつ物もあつてせくも傾

いぬる身月のもつらき一づく徳も徳の毛あまればなきはそ

書いのもつらき一づく徳も徳の毛あまればなきはそ

とつらき一づく徳も徳の毛あまればなきはそ

いぬる身月のもつらき一づく徳も徳の毛あまればなきはそ

斯れは文政七年、この稿本とありし其の年刊録の作也し

さて原武雜の家ありし初の方病故市へとちれり後年栗

山先生辨の師とて言ひ力の也なり他の稗官者流の乃ぶ

所と何とも常の思哉の冊を編むとて初る事志とて此も

故に先年著述とて言ひ燕石雜話ありし玄同放言の如き有

用の事とて大なるされが関其後とて言ひ是とて言ひし年

之保七十二年の精力衰へたる益成り稿成りし時俗字
成りしに綴りて文章水の流るる如く流るる如く文体
一字の多し殊に流るる如く物事世に多し者椿説
弓張月「朝夷巡島記」「里見八大傳」の類多し「南卷騷奇俠客
傳」「近世説美少年録」の二書近年の著るるもの物語の事い
多し以編り編り傳境とて多し評判も高しとて近年
公巻「傾城水滸傳」あり大世に行る八大傳今九輯あり
満座とて近年の物ぬ以編の行るるもの今双と物何とて近年
故に近年浪花とて狂言ありとて近年浪花の画とて画
きたる大錦編救世實文浪花の流るるを見る又江都に狂

言も「之保七」の中年の夏本種西蕃田を以て名懸つ大傳御判樓閣
とて奥行も狂言作者金井由輔宮田壽助三郎五郎市七
黒春春梅齋流るる狂言成見物とて其役割のひとり二
加多つとて大塚信乃二やくありとて母二郎三役大村角五やく四役
鳴神八の大山道節五役とて七名郎六役加田少文吾右市川
海老流つとて大塚信乃二やくありとて母二郎三役大村角五やく四役
山林房八やく大塚現八右市川九藏とて五浪路二やく離衣三やく伏
姫の星の當妙間五浪川五浪郎五やく五浪郎六二やく馬加六託
三やく五浪郎六右大各右市川とて五浪和二やく和生三やく五浪四
浪郎五右市川壽美藏とて五浪和二やく成民三やく五浪五右市川

あふ吹やまへん文化三内魚年出版と武者修り木舟傳二部とつづ
さうあひつらるるものさう骨董鋪とせんもの物作らるる
ひもへるの思を近寄歩れ自らを得て木舟伝と外傳を
建帳はるものさう語らぬものさう下動いさうあつらるる市
中地御細も終もし彼木舟傳の骨董鋪とせんもの進せんとす
多へつ常其るものさうあつらるるものさうあつらるるもの
五年目とせん天保三壬辰年月の忘れられぬ景を以彼景の事入
るれが四代強も関表月三石翁の許が訪懐も木舟傳とせん
たまに相伝らるるものさうあつらるるものさうあつらるるもの
まへにあらあんの切らるるものさうあつらるるものさうあつらるるもの
長秘

延 信之具の拙作の秘書闕るるものさうあつらるるもの
いれぬ

○翁の終らるる天保三壬辰年月の忘れられぬ景を以彼景の事入
るれが四代強も関表月三石翁の許が訪懐も木舟傳とせん

○一〇〇のむの双紙の物作らるるものさうあつらるるもの
その三三三文武二道乃石通す其後三初が天下面鏡梅鉢の
以價も双紙の改らるるものさうあつらるるもの
傳が屋世身錦の裏多ると語られ多るものさうあつらるるもの
さうあつらるるものさうあつらるるもの

深川に傳長なる書師ありしと云ふ對成撰しし書抄見れり如
 く水滸傳の著述成ありしと云ふ誹謗して至唐山ありたりなり
 直にありしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ
 と云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ
 水滸傳の作者なりしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ
 おつて也やゆゑなりしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ
 翁の事なりしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ

曲亭馬琴肖像



十返舎一九

重田氏右貞一通称與とと駿河の産として吾橋町又深川佐
賀所占の意通油所書肆仙移住せり

○里守川喜白一九知事市九と傳ふ故市也作雅名と弱冠頃東

都出成候一説に田切君江都尹にありし時付はくまの坊大坂かりし彼地

主守志野流の香道種譽りし十返舎の号は苗熟香の十返知とく

物ととと了具のとと也並木子柳若竹笛新自下蔭の縁と

歌曲編述し多し流政の月は香道を授けり柳も寛政

六箇年復ひ東都を始し御史兩部ヲ著述して耕雲を採り

上也若市也三保二年卯年病はは津多高在高松寺借ぬ

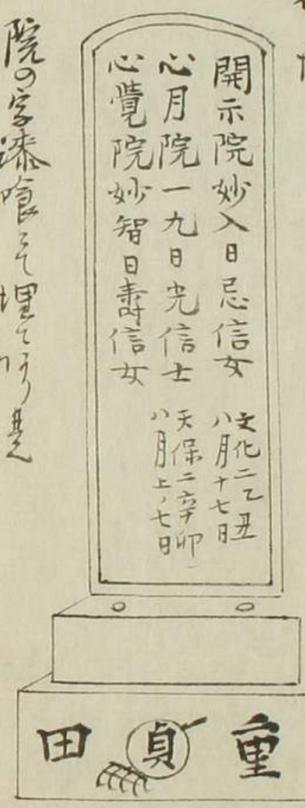
大朝云
木下蔭候間合
戦作者連名
若竹苗形
近松余七
並木子柳
此余七とある
一九とある
活東子云然り

注東を云ふは
此の仮字たる
されどおろし
歌あり

坤中ノ東陽院ニ葬ル 墓所ニ惣乱後裏門多ク
二側目ニ東ニ新目

辞 此の世に
世 此の世に
世 此の世に

墓碑面



院の字添増し埋り
所改葬の節ニ斯セ

○文化十年西年予得史道と標題し一
謬自筆の撰久と書集二卷とあり
今見まはす心もく秘置しある白

吾師書寫月曆室身也 尤之醒矣
書集より此の事多れれは
長身五葉成りわき
一見の上其月
一徳を以て
然るに
人か傳或入日
實を以て
まゝの
み我

若葉屋橋上ひとれ 日良十五金を紺屋所より一九とくし親し
るしとく一九うき書の一圓忘の佛より招れ殿所帰師の會席
に事しう縁を予と師の縁と出會し去年圓の春より知りたり水と予
が信に招きて曰く年々うきとさきう頃貴君の書多しう者を見多し借
りて傳へ寺の門書とてあつた多しとありと見え多し其のうきとく人
傳へてうきとれしとくし例に予にさき方よりゆれ其人の若く確知はたれ
し斯問にけり後つとるもの故に出さしと知りしとく世に浮現
少多しとくしとるしとるふ其時十五金にさきうく其色を奪てとく
世に浮現を奪り世に弘むるに達多しとく借りて或は加も書多しとくを
弘むるに生業の妨もさきぬれしとく書りし借りて

か拘りしとく程の事成書とて思ふ其心成得のうきとく予とるしとく
不理とておれと拙著とてさき一圓より秘録とて弘むる人を見せんと
業とていふも又様とて世にさきとていふも其の隨筆の書とてさきとく
家とて秘録とて値筆とて高き借りの名簿とて書留とてさきとく
常の事とてさきとて何様とてさきとくさきとくさきとくさきとく
見せるとく偏満の者もつらじとて月今櫻とて人見とてさきとく
れが寄とてさきとて院つれとて一九の碑とてさきとて高きとてさきとく
傳とて録とてさきとて寫とて借りの人見とて集り金鬼角とてさきとく
とてぬれとて相とて碁所とてさきとて何時とて果とてさきとく
とてぬれとて福とてさきとて思ふとてさきとて舎とて師とてさきとく

証記あると聞かむと悉く粗齧して其を并べ功ありと撰史不
面の書とて之を藤栗毛八編とて然るより西暦の書あり
統編の出るより知らざるありて既近年統五編に之れ下
其しとては正しき事なり

又同年同之の撰多し統藤栗毛五編冊下の巻々市書賣か
業の如くあり十五卷より少部依り多し文の長

或人撰史通と表題あり右撰史の撰史通と出たり讀中は撰
史に其定多し十九卷の事とて其撰得あり依り之が語し
事

西村永壽堂識

おれりし梅も統藤栗毛五編より同者端も存りの

近年巻間年三編成して函物者の撰史通は十五卷より撰史通
と撰史通とあり然るに如くして其定多し十九卷の事とて其撰得あり依り之が語し
撰史通の如くありて其の撰史通とて其定多し十九卷の事とて其撰得あり依り之が語し
撰史通の如くありて其の撰史通とて其定多し十九卷の事とて其撰得あり依り之が語し
撰史通の如くありて其の撰史通とて其定多し十九卷の事とて其撰得あり依り之が語し

○例の書画帳と人の撰史通とあり

陰陽の二巻ありて其の撰史通とて其定多し十九卷の事とて其撰得あり依り之が語し
多し神を撰見たりて其の撰史通とて其定多し十九卷の事とて其撰得あり依り之が語し
あつたりし事あり
之を撰史通とて其の撰史通とて其定多し十九卷の事とて其撰得あり依り之が語し

常の心も所のたま歌うの昔句のいりやうのま

五 まうや君をうも錫杖のうらうらうと生れる身

近五 松堀のうらうらう近れを叶のれをみかやい

春創 常もれいぬ花のなまはく下るる梅の毒を

柳の 良弱の玉柳と地をくはら砂をいひしをれ

蘿崗 唐もく人笑うらうとくも是大根のくまうらう

天の糸もくし見れ目の上うらうとあお庭山のまゆ

まのひとく酒の恵のむとくくものむ海川上へ

神の身も多るなとくまもひく茶をいりやうの増

の髪 目も身も多るなとくまもひく茶をいりやうの増

大要 鳥羽玉の誓の思本、大系女のうらう梅の花の

松女の ねまふむらうのたうらう

狐巻 生解り三人はくまもひく茶をいりやうの増

血發 生解り三人はくまもひく茶をいりやうの増

十返舎一九肖像



柳亭種彦

姓源名知久壹在朝と云し 且新相と云ふも又信長傳の事なり 田舎
源氏方へ行はれり 源氏も 南無高尾彦四郎と云 歴下なる倉福二百俵
賜ふる 貞横自氏にして 甲州士と云 浅草堀田平 芽室行 初（赤）門人
と云ふ 漢画の言の後 俳諧の古調の好む 又柳亭 詠風を嗜む 秀吟
多し 元禄三年七月十六日卒 行年六十二 叢坂下 平河田淨寺
葬す

法号 芳寛院殿勇誉心禪居士

辞世 ちる丸くさあまの 秋の栞うふ

源氏方の事あり 大なる秋の栞なり

名出の粘強の麻素袍を以て二〇三〇と名づくるけおちて皺多く見
 苦しむる樂を以て入後外の回廊の役者へ奉りてあつてあつてもやま
 其儘に衣裳欄へおけりて又明る日其場まれば前の素袍を着せし
 故に其見苦しうしく秀鶴之りて衣裳を以ておけりて自ら其素
 袍の水のりてよくあつて毎日の如く丁寧とて「お」がで相言つて
 舞臺にて列舞の戲子もあつてい時一降もくして立派いとも上
 ちしし見え肴客の目もたれぬ戲場中の役も月次つて彼
 下谷量らる者も後の狂言といふの役もあつて人と其役がせめて試
 くと衆のほうと拙い役割の付多る事業も遠く其役もあつて勤
 少るれりてあつてい時一降もくして立派いとも上
 今其素

松残もあつて名出真も者初より其各量衆に越多る戲作も
 以て秀鶴の心を以て常の心は月一回一章たつてもあつてあつて
 されあつて丁寧な後してつてあつてあつてあつてあつてあつて
 又常の月一回の硯か子の形もあつて其意も月詠
 の狂歌もあつて其意

名出の粘強の麻素袍を以て二〇三〇と名づくるけおちて皺多く見

江戸本子
 思
 秋
 其

栢亭種彦肖像



烏亭馬馬

中村公若英視号の許(河橋)と云別号我桃栗山人柿苜齋といふ
担瓶野見とふまじんまゝのわろ名何し和自水在味助と稱して本
所古堂町之辰辰も原大子の標果より或作の在る一とありてあ承天明實の
言る正一担担物或酒及本又の海より作あり且之れ齋れある後
此日再息し又或陽の作の作補物と云ふまゝしし如著作せし
實政五年の初よりして之改五社年六月二十日迄年八十北布如表町年
寶山日取勝寺 詠台 之華の法号 三樂院 壽徳馬馬
辞世 ありまゝ也 一の死に今を 〇は 〇の敷るの道

著述 歌辭故年代記

小紙本五
編正廿冊

談
泐
樓
焉
馬
肖
像



北 裔

勝川錦代家名とす初者朗とす勝川者兼門人之俗稱鉄五郎
 後兼破門せられたる勝川正政の業者朗とす其後遠屋宗理の跡を
 継いで有宗理とす後政何れも右の家元と稱し北裔正政實政と
 改む其名門人を傳へて雷信と改め丹波山人とす戰斗し改め是を
 山人とすて為とある多む如斯の聲して信在好多如斯の所周鏡師
 中島伊勢男と作名か時方とす可候とす又是和裔といふ奥佛とす
 嘉永二所年四月十八日江戸中九千淺草寺軒寺町並言教寺とす
 法号 南照院寄言北裔信士
 辞世人魂とすゆきまんとす如夏の原旅

北齋肖像



豊國

号在陽南と云 豊川 豊考の門人云 昔神明命 三陽町の産と
し 人形師の男あり 俗称倉橋熊吉と云 初夢町 自 洛堀江
町 居り 又植田油屋 移り 豊舞妓 浮名あり 此熊吉の 名入り 又流
布 子ありし 合巻 類 枚 卷 といふ あり 代 文政 八 閏 年 閏 月 七 日
没 年 五 十 七 三 南 聖 取 功 運 寺 葬 也

法号 得妙院 寶身 新 鹿 真 信 士

辞世 燒 草 子 あり 歎 あり あり 影 佐 師 下

豊國肖像



國 貞

号成五海亭といひ後香蝶樓と云ふ沿称角田在五中本所
五目つ産あり後此を伝へて豊岡の門人として所居を築て今二
代月豊岡に改む徑者似顔繪の名へて出處の答にあり天保四
五年高名の画商高凌ら門人として其一蝶も現存あり

此の書は... 楊の... 石家... 枝...
... 齋... 遺... 漏... あり... あり... あり... あり...
あり

東紫稿

五 東子

國貞肖像



